

## 「主役は俺だー2021年、秋」2部編

- 比嘉 匠（ひが・たくみ） 東京農業大 RB/LB 4年
- 板倉 智也（いたくら・ともや） 北海道医療大 QB/DB 5年
- 広島 樹（ひろしま・いつき） 北海道科学大 RB/LB 4年
- 広島 拳（ひろしま・あぐる） 北海道科学大 QB/LB 1年

2021年の道学生選手権が10月10日、開幕する。コロナ禍に翻弄されて日程調整が難航し、1、2部ともリーグ戦を断念して異例のトーナメント戦で北海道王者を競うことになった。北海道科学大、東京農業大、北海道医療大の3校で争う2部は、初戦で東京農業大と北海道医療大が対戦し、勝者が北海道科学大と2部優勝をかけて激突する。1部校の影に隠れがちだが、どっこい、2部にも注目選手が目白押しだ。

東京農業大のRB比嘉匠（生物産業学部海洋水産学科）と北海道医療大の板倉智也（歯学部歯学科）はともに沖縄出身。比嘉は、昨年の秋季リーグ棄権の雪辱を期し、留年して今季に臨む。板倉は、同校の慣例の4年で現役引退を返上してフィールドに立つ。「島人（しまんちゅう）」の「5年生」対決から目が離せない。

比嘉は高校カヌーの名門・沖縄水産高の出身。3年生の時には全国高校総体のカナディアンフォア種目で7位になり、U-18日本代表の最終選考まで残った実力者だ。水産の勉強と北海道にあこがれて網走の東京農業大に進学した。大学ではボートをやりたかったが、部がなかったことからアメフト部に飛び込んだ。「体を動かしたかった。アメフトは格好が良かった」のが入部の動機だ。カヌーで鍛えた170センチ、70キロの体を生かして2年生からRBに。「タックルされても倒れない体幹の強さが自慢」と胸を張る。

忘れられないプレーがある。3年生の室蘭工業大戦。2部の優勝決定戦となった一戦で、8-15で迎えた第4Q。敵陣1ヤードまで攻め込み、比嘉のダイブでTDを狙ったが、室蘭工業大の守備に止められた。「それまでインサイドがガンガン出ていたのに、あの1ヤードが取れなかった」と、同点に追いつき損ねたプレーを今も悔しがる。そして昨年のリーグ戦の棄権。網走ではコロナウイルス感染者が少なかったにもかかわらず、東京の本学の決定で全国一律に部活が禁止された。「最後のシーズンを、もやもやしたままで終わりたくなかった」と、卒業延期と20

21年シーズンの出場を決めた。

7人の新入生と、昨季試合経験のない2人の2年生のコーチ役を務めながら練習を重ねてきた今季。「攻守両面でプレーできる体づくりと、2部のライバルたちのスカウティングも力を入れてきた」と言う。筋力トレーニングの成果で、体重も85キロまで増やした。「今年はラン主体の攻撃になる。オフェンスで押し込み、ディフェンスは確実に止める。1年生たちを引っ張るプレーをしたい」と意気込む。そして「何が何でも2部優勝し、1部昇格をつかみ取る」と決意する。

板倉は県中部の進学校・球陽高の出身。野球部で投手を務めた。歯科医師を目指して大学受験で浪人したが、北海道医療大に特待生で合格し、初めての北海道にやってきた。「入学直後のアメフト部主催の食事会で先輩に誘われた。アメフトは、琉球大の試合を1度見たことがあるだけだったが、浪人中も筋トレをしていて体力に自信があったのと、部の雰囲気の良いので入部を決めた」という。小学生から球技に親しんだ経験から、初めて投げるフットボールもきれいにスピンをかけられた。ポジションも希望通りにQBに。初ゲームとなった1年生の時のOB戦で、「数球だったが、パスの成功率は



100%だった」と納得のデビューを飾った。

事情があって2年生は休部。先発デビューとなった3年生の釧路公立大戦では待望のTDパスも決めた。「RBにハンドオフのフェイクをして守備を引き付け、DBの後ろに回り込んだレシーバーへのパス。30ヤードから40ヤードくらいの距離があったが、タイミングもスローイングもばっちり決まった」と今も忘れられない一投だった。

得意プレーは肩の強さを生かしたロングパス。「40ヤードは確実に投げられる」と胸を張る。「着実に進めることが一番」と攻撃リーダーの自覚も忘れない。今季の目標は「新たな戦力となった1、2年生に、来年以降のチームを託せる試合をすること。若手が経験を積める試合をしたい」と、コロナ禍でリーグ戦を棄権した昨季の経験を踏まえ、チーム再建の足がかりを強調する。

初戦で対戦する東京農業大の比嘉については「沖縄出身の選手がいることは知っていたが、自分のことに精一杯意識したことはなかった」と言うものの、「試合になったら、すごく熱くなるのが沖縄人」と島人パワーの激突を楽しみにしている。

一方、北海道科学大の広島樹（工学部建築学科）と広島拳（工学部都市環境学科）は「兄弟パワー」で2年ぶりの勝利と4年ぶりの優勝を目指す。

兄の樹は今季の主将。1年生を含めて14人の少数精鋭チームの中でRBとLBとして攻守でチームを引っ張る。札幌白石高で野球部の外野手を務め、1年先輩が昨季の道科学大アメフト部の伊藤主将。入学と同時に伊藤先輩にアメフト部に誘われた。3年生で臨んだ昨季、2部は釧路公立大との一騎打ちになったが、道科学大は部員不足もあって7-16で惜敗した。「あっという間のシーズンだった。世話になった先輩ともっとやりたかった」と悔いの残るシーズンとなった。

弟の拳は3人の新入生の1人。札幌新陽高で野球部に所属し、投手と三塁手を務めた。「兄の影響でアメフト部に入った」と言う。惜敗した昨季の釧路公立大戦で兄を応援し「格好良かった。大学では野球とは違うスポーツをしたくなった」とアメフト部の門をたたいた。「当たるのもおもしろそう」とやる気十分だ。野球の投手経験を買われてポジションはQBとLB。「体験会でボールを投げたら、QBをやらないかと声をかけられた」と顔をほころばせる。

兄によると「弟はフィジカルが強い」。そして「そこを生かしてアグレッシブな選手になってほしい」と期待する。弟は「兄はアメフトを良く知っている。周りに目を配り、適切な指示を出している」と尊敬する。弟は控えQBのため、攻撃で兄へハンドオフする場面は微妙だが、守備では同じLBとしてフィールドに立つ可能性は高い。兄は「弟には攻めたプレーをしてほしい。ミスしても自分がカバーする。兄弟なので、口で言わなくても考えていることが分かる」とコンビネーションに自信を見せる。弟も「強力守備を見せつけたい」と意気込んでいる。

